

創造性の学びへ、ようこそ。

長野美術専門学校 学校長 小林 勝彦

ここは「美専展」^{※1}の会場です。学生は今まさに、学びの集大成である「総合制作」を社会にお披露目しているところです。この学生の取り組みを突き詰めて言うならば、それは創造性の実践(クリエイティブ)に他なりません。

我が国への関わりも深いイギリスの美術・文芸評論家であるハーバート・リードは、およそ100年前にこんな言葉を残しています。「我々は、個性的で、新しく工夫され、感情のこもったものを指し示す一つの言葉が欲しい。人間と彼の意志によって形づくられたものとの間に存在する関係を指し示す一つの言葉が欲しい。つまり、我々の理想が、現実におよぼす効果を表す言葉、我々が愛する仕事を表すような言葉が欲しい(略)」^{※2}と、創造的であることの意味を説いています。本校は「クリエイティブこそ社会形成の要である」ことを堅く信じ、表明し続けています。そして学生は実践において創造性を学び、その大義を確かめているのです。リードが生きていれば、さぞかし賛同し、応援してくれたことでしょう。

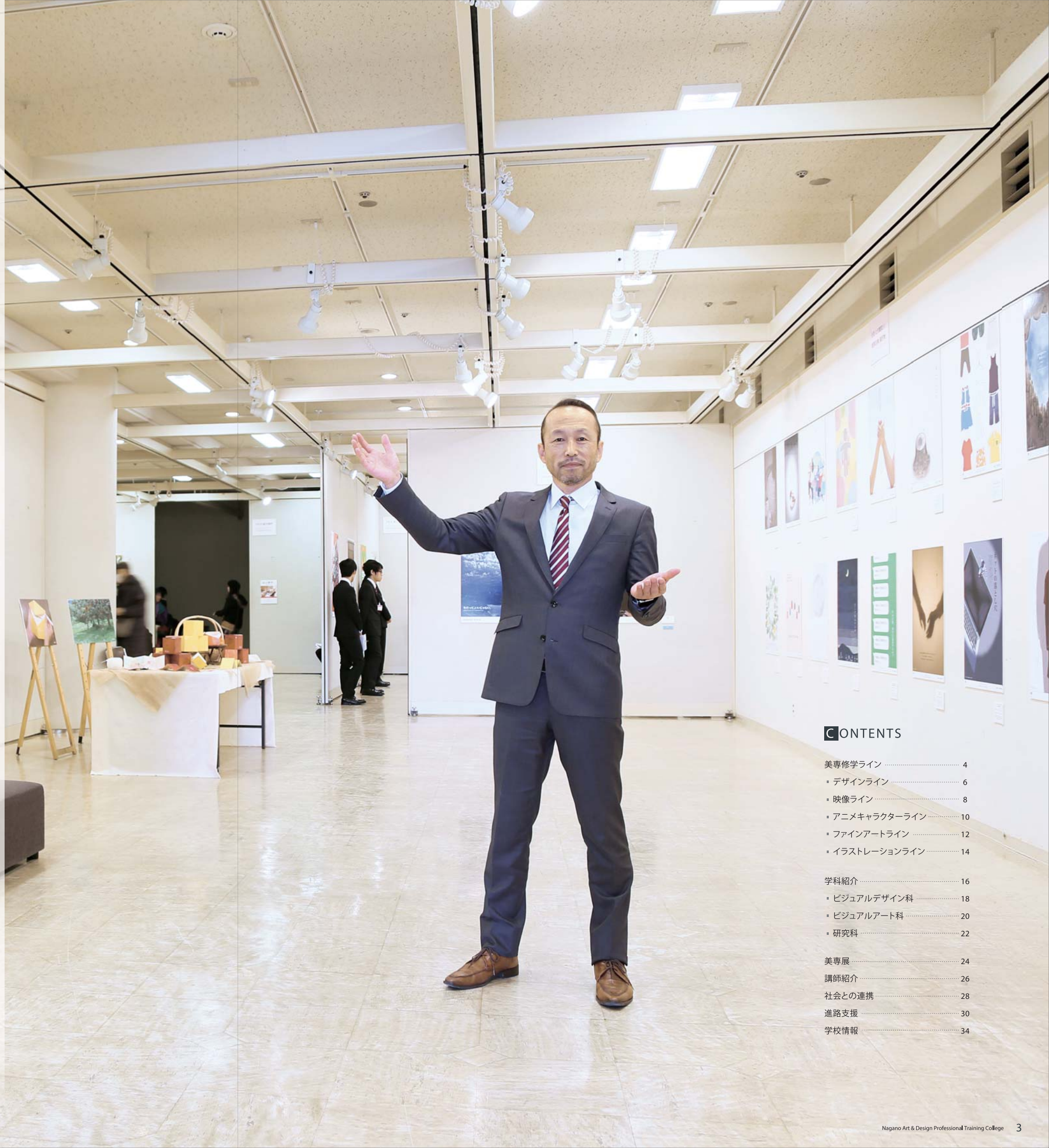
話を「美専展」に戻しますが、ご来場の方から「美専生の作品はよく考えられている」「よくできている」との賞賛の言葉をいただくことがあります。それは、学生の着眼に自身の内にあった価値観を見出した言葉であり、手を尽くした形づくりにその具現を実感した言葉なのではないでしょうか。私はこれこそが創造性の実践(クリエイティブ)の成果であると確信しています。

さて、リードの言わば“100年の理想”は現代において実現しているのでしょうか。残念ながら、現代は消費文化が主流であり、経済価値が個性の自由を圧迫しています。目的のために新しく工夫することよりも、いかに早くそして多くの利益を手にするかが優先される時代なのではないでしょうか。大量消費に基づいた産業構造は経済や教育に、ひいては人生の進路にも偏りを生じさせ、大都市への人の集中をもたらしています。本来は地域にあるべきリアルな視点が、都市モデルの視点によって焦点を失っています。

我々は、今いる場所でしっかりとリアルな視点を持ち、人間本来の豊かさを求めましょう。美術は趣味や鑑賞、ましてや投機の対象だけのものではありません。デザインワークをあらゆる仕事や生活に活かし、そしてアートをあらゆるメディアに活かしましょう。

来たるべき社会のための、創造性の学びへ、ようこそ。

※1 長野美術専門学校の「総合制作」を一般公開する年1回の展覧会
※2 「児童心理」1955年/勝見勝著作集 第1巻美学・教育論に収録



CONTENTS

美専修学ライン	4
▪ デザインライン	6
▪ 映像ライン	8
▪ アニメキャラクターライン	10
▪ ファインアートライン	12
▪ イラストレーションライン	14
学科紹介	16
▪ ビジュアルデザイン科	18
▪ ビジュアルアート科	20
▪ 研究科	22
美専展	24
講師紹介	26
社会との連携	28
進路支援	30
学校情報	34